【報告】バスで行く首都圏基地ツアー

梶野 宏

昨年の11月19日（日）と12月10日（日）の二回に分けて、市民の意見30の会・東京の主催で、「ここが見たい、知りたい米軍再編バスで行く首都圏基地ツアー」が行なわれた。気になりつつもなかなか見に行けない「足下の基地」を検証するためこのツアーに参加した。

1　神奈川コース（11月19日）

朝10時にJR相模原駅の改札出口に集合。この日は、木元茂夫さん（すべての基地に「NO！」を・ファイト神奈川）が基地ツアーに同行し案内してくれた。

相模補給廠

相模原駅は米陸軍相模補給廠と隣接している。最近出来た駅ビルの駐車場屋上が、絶好のウォッチ・スポット。政府関係の視察団もここから基地を眺めたという。JRの線路の向こう側（北側）にひろがる相模補給廠の様子が文字通り「一望」できた。

私たちが見下ろしている位置は、相模補給廠のほぼ西端で、ここから次の矢部駅まで、線路に隣接して基地がずっと続く。東京ドームが約46個入るという、その敷地の半分くらいは「空き地」に見える。ここの案内は、相模補給廠監視団の沢田政司さん。

基地の管理部隊は、在日米陸軍第17地域支援群。第35補給・業務大隊司令部が所属し、いわゆる兵站・物資供給施設。小銃から、糧食、野戦病院セット、各種工作車両に至るまで、膨大な物資が常時保管されているという。

当日基地内で動いていたのは、住宅区域にある売店に、なにやら商品を搬入している大型トラックと、ジョギングする男性ぐらい。およそ戦闘をイメージさせるものはなにも見当たらない。だが、ここはベトナム戦争当時には、壊れた戦車を修理し再出撃させる役割を担い、現在の「空き地」には、戦車が溢れていたという。

米軍再編の一環として、キャンプ座間に陸軍第1軍団司令部が移転してくるのにともなって、相模補給廠に指揮訓練センターが設置されようとしている。そうなると、数百台の車両と共に、現在約150名の軍人・軍属（従業員は600名）も倍増されるとのこと。

座間基地・厚木基地

一同はバスに乗り、相模原を後にして、座間基地前を経由して厚木基地へ向かう。

小高くなった座間基地の滑走路（キャスナー飛行場。UH60Aが運用されている）を遠望しつつバスが進む。座間に飛行場があったことは初耳で少し驚いた。

正門に向かう道中には、再編による陸軍第一軍団司令部の移設に反対の意思表示をする、地元自治体（相模原市・座間市）による登り旗やポスター、ステッカーなどが、いたるところに掲げられていた。基地の周辺には、米兵にも読めるように英語で書かれた横断幕も。

移動中に木元さんが、もともと座間基地は1937年に旧日本軍が移転してきたこと（天皇ヒロヒトによって相武台と命名された）、その接収の際にも地元農民の強い反発があったこと、戦後、基地は米軍に引き継がれ現在に至っていること、それらが、基地の恒久化を許さないといった地元意識の根源にあることなどを解説した。

つづく厚木基地では、基地内の米軍住宅と隣接する海上自衛隊の官舎とのコントラ

山駅）と西武新宿線（稲荷山公園駅）に挟まるかたちで基地が存在する。「16個の部隊と約4、300名の隊員を擁する航空自衛隊最大級の基地」（入間基地HPより）というが、休日とあって、駐機している飛行機はあるが、人影は見えなかった。またPAC2（地対空誘導弾ペトリオット）らしきものを見ることが出来た。この入間基地には、06年度中にミサイル防衛システムの一環であるPAC3（PAC2を改良したもの）が、全国に先駆けて配備されようとしている。山下さんたちは、それに対して防衛庁への問い合わせや、学習集会、デモなどの取り組みを行なっている。

横田基地

入間基地から横田基地へ向かった。まず基地の北側に位置する瑞穂町の瑞穂ビューパーク・スカイホールの屋上から、横田基地を一望する。そこには福生市議の遠藤洋一さんが案内に来てくれた。

米軍再編では、府中にある航空自衛隊の航空総隊司令部（戦闘部隊を統括する組織）がこの横田に移転し、現在ある在日米軍司令部と第五空軍司令部に加え、日米の共同統合運用調整所が設置される。ミサイル防衛（MD）の運用では中間距離ミサイルの発射から、情報共有や共同運用強化が図られるようになるという。

バスにもどり、「老後の楽しみに、このちかくのマンションを購入して基地ウォッチを続けたい」という遠藤さんの話に参加者一同爆笑しながら、基地正門前をゆっくり走行。その奥の方に、航空総隊本部の建物が建つという。

大沢さんの計らいで、立川基地北側にいまも残るアメリカ村（50年頃に米兵やその家族向けに建てられた住宅地）の中を通り、立川駅前で解散した。

（かじの・ひろし、派兵チェック編集委員会）

〔装輪装甲車の撮影　水垣奈津子〕

【付記　07年1月12日、横須賀市選挙管理委員会は、「原子力空母母港化の是非を問う住民投票を成功させる会」が06年12月に提出した署名の効力を認めました。同会は1月17日、蒲谷亮一市長に条例制定を請求しました。同市長は2月上旬に臨時市議会を招集し、議会が条例案を審議する見通しです。（編集部）】

▼今回の法改正（省移行法）により、防衛庁を、省に昇格させ、国防と安全保障の企画立案を担う政策官庁として位置付け、さらには、国防と国際社会の平和に取り組む我が国の姿勢を明確にすることができました。これは、とりもなおさず、戦後レジームから脱却し、新たな国造りを行なうための基礎、大きな一歩となるものであります。（2007年1月9日、防衛省移行記念式典における安倍晋三首相の訓示より）（編集部）

ストが印象的だった。飛行場の北端へまわり、降り出した雨の中、滑走路を車窓より望める。日曜日とあって、まったく飛行がないので、ここもただ静かな空間が広がるのみ。車上で木元さんから、「空母艦載機は空母停泊中には離発着出来ず、空母が横須賀に入港する際に、沖合で全艦載機が飛び立ち、この厚木に向かう」という話を聞き、一同しきりと感心の声。

横須賀基地

横須賀では、三笠公園から米海軍横須賀基地を眺めた後、正門前を通り過ぎ、ヴェルニー公園を基地を眺めながら歩く。米軍の埠頭に停泊する自衛隊の潜水艦などが見られる。

その後、「原子力空母母港化の是非を問う住民投票を成功させる会」の事務所におじゃまして、新倉裕史さん（同会共同代表、非核市民宣言運動ヨコスカ）から話を聞く。ちょうど住民投票条例の制定を求めるための署名運動が始まったところ（06年11月10日開始）。署名を集める受任者が2000名を超え、街頭での反応も極めていいと、新倉さんの話。ただ、横須賀市長の容認発言、外務省が税金を使って米軍が主張する原子力空母の安全性を強調するパンフを全戸配布するなど、厳しい情勢は変わらない、とも聞いた。

なお、この署名は、直接請求に必要な有権者の50分の1（約7000名）を大幅に超える41、551名分が集まり、12月15日に横須賀市選挙管理委員会に提出された。これは、有権者の11・68％にあたるもので、今後、条例制定に向けての市議会への働きかけが続けられる、とのこと（末尾付記参照）。

2　東京・埼玉コース（12月10日）

陸上自衛隊広報センター

第2回目の基地ツアーの集合場所は、東武東上線和光市駅。大沢ゆたか立川市議の運転するバスで、陸上自衛隊朝霞駐屯地へ向かう。02年オープンの陸上自衛隊広報センターを見学する。

1階の展示ゾーンには、射撃シミュレータ、フライトシミュレータといったテレビゲーム式の「実戦？体験コーナー」や服装体験コーナー、戦車やヘリの展示、陸自をアピールする3Dシアターなどがある。ほとんどアミューズメント施設で、射撃シミュレータを実際に「体験」してみたが、TVゲーム同様でそこそこ面白く「遊べる」。射撃の「結果」による得点がプリント出力されるので、繰り返しチャレンジもしたくなる。3Dシアターでは、陸自「花形」の空挺部隊（パラシュート部隊）を中心に、迫力のある三次元（3D）映像が映し出されていて、あたかも手が触れそうなぐらい目の前に突き出されるライフルの銃口、思わずのけぞりながら見入ってしまった。小さな子ども連れも多くいた。2階には、陸自の歴史や組織をパネルで紹介するコーナーがある。

この日は、イラク・サマワ特別展示もあった。イベントホールには、サマワでの陸自の活動を紹介するパネルや、地域の部族長から送られたお礼の品などの展示があり、庭には、英語とアラビア語で「日本国」と書かれた「日の丸」の入った装輪装甲車（実際に使用されたもの、次ページに写真）なども展示されていた。

「おみやげ」売店もあり、名物といわれる「炎の大作戦」（団子と饅頭の詰め合わせで、それぞれに一、二個、激辛唐辛子のあんこが入っている。「団子ロシアンルーレット式2／12」などと表記されている）を購入すると（次ページに写真）、「撃（GEKI）」と朱色の文字の入ったビニール袋に入れて渡された。そのほかにも、自衛隊で実際に使用しているレトルトの食品や海軍カレー、マスコットの「りっくん」「あさかちゃん」等のグッズなどもある。ここもそれなりに「楽しめる」。が、「楽しんじゃ、まずいよな……」との気分とともに次へ移動した。

入間基地

入間市役所の前で、入間市議の山下修子さんらと合流して、航空自衛隊入間基地に。狭山市と入間市にまたがり、西武池袋線（狭